

龍谷大学

大学教育開発センター通信

Ryukoku University Center of Educational Development Report

2012年度

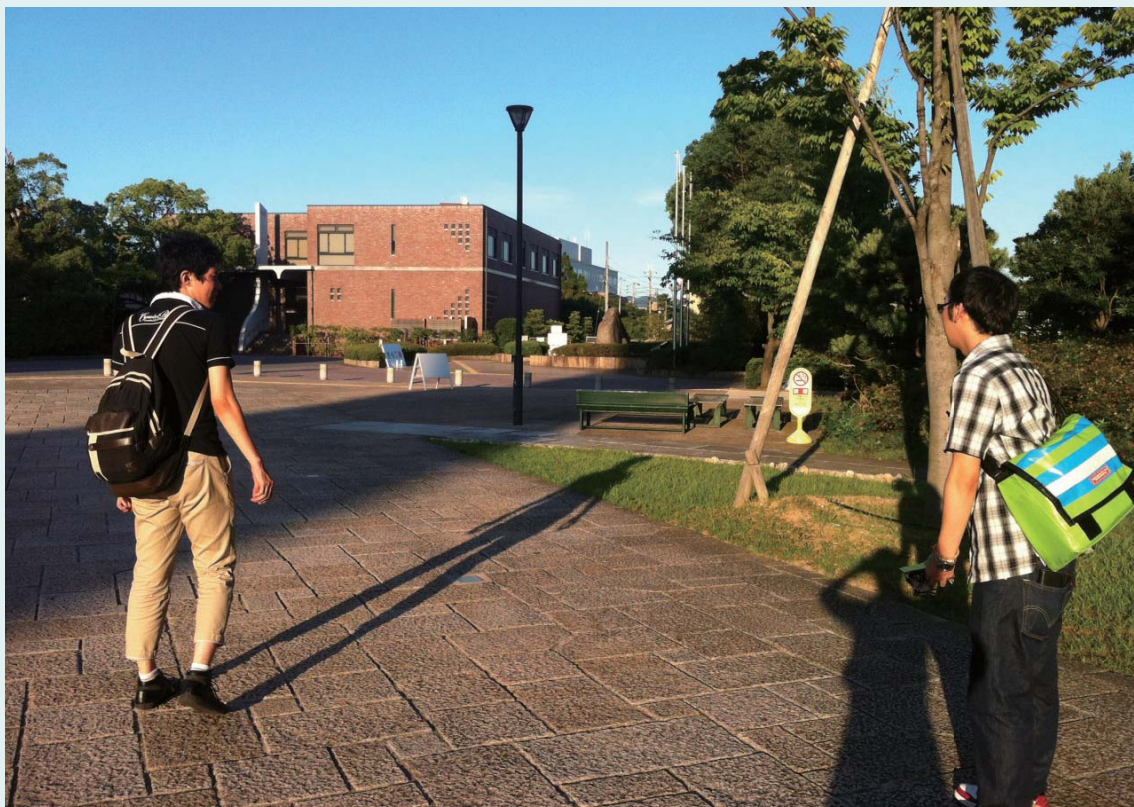
01

通算30号



龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY

大学教育開発センター | 〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
Tel 075-645-2163 Fax 075-645-2190 <http://www.ryukoku.ac.jp/faculty/fd/index.html>
発行日：2012年11月 編集・発行：龍谷大学 大学教育開発センター



学生FDサミット会場へ向かう9学部合同学生会メンバー

2012, Number 01

CONTENTS

p3 キャリア教育に関する講演会 開催報告

p4 【特集】
村田健三郎入試部長、
長谷川岳史大学教育開発センター長 対談
「本学の教育と入学試験のあり方について」

p9 【NEW AMENITY】 深草学舎22号館107教室(多機能室)

p10 新着図書紹介

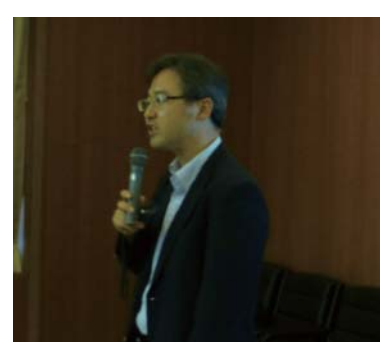
p12 「学生FDサミット」参加報告

キャリア教育に関する講演会 開催報告

2012 (平成 24) 年 9 月 28 日、慶應義塾大学の伊藤健二氏をお招きし、大学教育開発センターとキャリアセンターの共催で、「キャリア教育に関する講演会『学士課程教育の実質化とキャリア教育』」を開催いたしました。

本講演会は、正課におけるキャリア教育の検討の必要性について言及した、「キャリア教育を推進・運営する体制について(上申)」を受けて継続的に開催されている、教務主任とキャリア開発主任の懇談会の一環として、大学教育開発センターが中心となり開催したものです。

講演会は、懇談会の構成員以外の学内教職員に広く開放し、当日は赤松学長をはじめ教員 22 名、職員 19 名の計 41 名が参加しました。



前半に於いて中央教育審議会大学部会における学士課程教育の実質化に関する内容を概観した後、後半では、就業力育成支援事業、産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業を中心に、産業界のニーズに対応した産学連携教育、能動的学習に関する問題提起をして頂きました。

内容の詳細は、改めて紹介させていただきます。

伊藤健二氏 ご略歴

慶應義塾大学大学院 政策メディア研究科 特別研究准教授

みずほ情報総研にて、7 省庁の委員等を務め政策提言を行いつつ、産学官連携のプロジェクトを長年に亘って企画・推進する。2005 年 4 月より慶應義塾大学を兼任後も、産学官連携によりビジネスモデル研究・実践を行っている。

特

集

「本学の教育と入学試

入試部長就任2年目を迎えた
村田健三郎先生に、本学の教
育と入学試験のあり方につい
てお話いただきました。

対 談

入試部長

村田 健三郎



大学教育開発センター長

長谷川 岳史



村田健三郎 入試部長
(政策学部教授)

長谷川 岳史 大学教育開発センター長
(経営学部教授)

験のあり方について」

アドミッションポリシー（AP）について

長谷川 今日は、各学部等の教学責任主体と連携しながら、大学の入口部分を担っていただいている入試部の業務や、課題として認識していることをお話いただきたいと思います。

大学教育開発センターとして特に注目しているのは、アドミッションポリシー（以下「AP」）についてです。志願者の意欲・能力・適正を総合的に評価する入試への転換が議論されている中、本学が実施している入試制度や、実際に入学試験で課している入試科目とAPの対応を確認する必要があると思います。

村田 「政策・制度検討委員会」という、入試制度について検討する会議を入試部で所管しています。今年度この委員会、入試形態をこれ以上複雑化する形に変えていくよりも、一定整理することで、APの再考、ひいてはカリキュラムポリシー（CP）やディプロマポリシー（DP）と関連をもつ制度設計ができないか提案することを考えています。

また、APと関連した課題認識として、特に3教科から5教科を課す「センター試験利用入試（前期・中期・後期）」について、募集人員枠を含めてどのように活用していくかが重要であると思っています。

同時に推薦入試の見直しが一定必要であると感じており、昨年度末に各学部と懇談をして、一般入試と推薦入試の募集定員の割合や指定校推薦入試における指定校の選定について相談したところです。

長谷川 かなり判断が難しい内容ですね。

村田 指定校推薦入試については、今まで高校との信頼関係によるところが大きかったのですが、入学後の正課内外の学生生活状況を経年的に調査し、学部と協力しながら今後の方向性を見極めていく必要があると考えています。また、一般入試については、人文・社会系学部の入試を文系入試として実施しているわけですが、この辺も工夫できないかと思っています。

大学と学部の特徴

長谷川 高校の方からすると、各学部の教育内容や特色が見



えにくい部分があると思います。

村田 特色を打ち出すことは難しいところもあると思いますが、それ故大学案内誌や学部別パンフレットの活用とともに、学部にはオープンキャンパスでの模擬講義や出張講義をお願いしているところです。

長谷川 興味関心を高校生がどの程度絞り込んで進路選択ができていくかという、実態は偏差値を前提として保護者や高校の先生が勧めた大学を受験するという状況もあるのではないのでしょうか。結果として入学しても不本意であるという状況が少なからず生じているのではと思います。

村田 仮に不本意な入学であったとしても、意義ある学生生活を送り本学で卒業まで全うしてもらうために、本学の魅力や育てる仕組みを伝えなければならないと思います。その一つとして、入学間もない学修、初年次教育が重要なのではないのでしょうか。偏差値だけではなく、志望につながる魅力を入試部として訴え続けなければと思います。

長谷川 入学準備サポートプログラム等の入学前教育と、初年次教育、そして教養教育、専門教育へと繋がる、本学の展開する「教育のストーリー性」を学生に伝えなければなりません。入試制度の改革も必要なのですが、やはり根本は学部の教育です。いくら入口をいじっても駄目なのです。それはどこの大学でも同じ話だと思います。

奨学金制度について

村田 「アカデミックスカラシップ」という制度がありますが、取得者が減ってきています。そのような奨学金制度を持っていたとしても、やはり合格者の中の1割にも満たない人数が対象という状況です。

長谷川 アカデミックスカラシップの該当者も、他大学に進学している可能性もありますね。

村田 当然、入試部としては、本学の魅力の一つに学費減免があると捉えていますが、他大学が設定している奨学金制度との差別化を含め、さらに検討する必要があるとも考えています。

長谷川 受験生に対し何が本学の魅力となり得ているのかは実際に検証する必要があると思います。奨学金制度が充実している等、印象を基にした色々な意見がありますが、どれが有効なのか検証し、総合的に判断する必要があります。

また、最終的な目標をきちんと定めないままに、部分的な要因だけで一喜一憂するのではなく、一定期間、痛みを伴ってでも、本質的な部分で本学の魅力を強化することが必要です。

村田 入学試験については、量重視なのか質重視なのかとよく問われるのですが、踏み込めない部分があって、質を重視して「龍谷大学の入試はこうあるべきだ」と考えても、現実的には他

の大学の動きをみて試験日を設定する等、現実的な方策を取らざるを得ない状況があります。

長谷川 大学院の入試制度はいかがでしょうか。大学院科目の早期履修制度や推薦入試などを導入しているところもみられるようになっていきます。

村田 私の所属する政策学部では、早期履修制度の活用や社会人を対象とした修士課程を1年で修了できる制度も導入しています。その場合トータルでは学費も軽減されることになりそうですし、意欲を高く持った学生の入学にもつながるかもしれません。

高校・大学・社会の連続性

村田 中等教育は中等教育で、高等教育は高等教育で、それぞれ課題を抱えています。それぞれが解決しなければならない課題があることを理解し、それぞれの立場を尊重し合うことを前提に、どのような連携が可能かを検討することが大事だと思います。連携のあり方についても、中等教育機関全体と高等教育機関全体との連携か、個々の高校と大学の連携かによっても違いがあるでしょう。ましてや、高校・大学・社会との連携、連続性となると、検討しなければならないことが多くあるのではないのでしょうか。



長谷川 高大の接続は確かに課題ですが、そもそも、入試制度により測ることのできる学力と、高等教育に必要な学力の間にひずみがあるから初年次教育が重視されるわけですね。

村田 そうですね。初年次教育は、再教育とは異なると思いますし、卒業へ向けスタートをきる大事な時期での教育ですから重視されなければならないと思います。

推薦入試の場合についてみると、政策学部では「Ryusei GAP Term」というものを実施しており、大学における教育に通じる内容を入学前に勉強体験させています。そのため、入学しても違和感がなく、大学における学修とはそういうものだという認識で入ってきます。高大連携という観点では、全ての指定校等と連携できるわけではないけれども、そういう試みを通じて龍大の魅力をアピールすることも必要です。

長谷川 小さな成功を積み重ねることで、信頼とクオリティを維持できるはずですが。大学入試というと「学力低下」という文脈ばかりで議論してしまい、長所は何なのかという観点がありません。入試要綱やAPの内容からすると、多くの長所をもった学生を受け入れているのです。

村田 なるほど、おっしゃるとおりですね。

長谷川 APにしても見直しは必要かもしれませんが、あるコンセプトで学生を受け入れようと決めたことを、後々表面上のデータだけをとらえて、やはりやめようとか対症的に動くことが一番危険なのです。もう一回、本学が何を学生に求めるのか、最初のコンセプトを確認しないと、イメージだけで行動することになりかねません。

卒業後を見据えた教育

村田 入試に関する説明でも出口のことを求められます。大学が求める人物像、大学が育てる人物像やそれを育てる仕組みなどの魅力を伝え、それに共鳴した意欲の高い受験生が入学し、学生と大学との相互作用により社会が求める人材を育成し送り出す、その繰り返しが社会からの評価につながるのではないかと思います。

長谷川 必ずしも正課のみという観点ではなく、学生生活を総合的にとらえて、社会が求める人間として自分をアピールすることができ、学生を育成するという点で本学が寄与できる部分が

あるのではないのでしょうか。

村田 今年度の大学案内誌に、学長が「真の人間力を育む大学でありたい」とのメッセージを掲載しています。その内容は、今おっしゃったことにつな



る理念になると思うのです。高等教育機関としての教育に関するポリシーを通じて、各学部の教育に基づきながら真の人間力ある学生を育てていくことが、出口の段階でも反映されると思います。

長谷川 そうですね。大学が価値を提供するとともに、学生が自分自身を構築する力を育てられるということも大事ですね。

村田 国公立志向とか地元志向等の進路選択条件が言われますが、そうした見方をこえ龍谷大学への進学を考えてもらえるか。それは入試形態や入試科目の問題もあるのだけれども、あくまでも受け入れる側が来て欲しい学生に何を求めているか、何を与えられるかというメッセージを伝え、中身を充実させることが重要なのだと思います。

長谷川 開けようとする扉と、扉を開けた時にどう見えるかということですね。

アドミッションサポーターについて

村田 入試部の取り組みとして、「アドミッションサポーター（以下「アドサポ」）」というものが、現在100名超の学生スタッフが高校生や保護者の方にオープンキャンパス等で本学の紹介をしています。

長谷川 学生数が8000名以上の大学のFDに関する連盟で、全国私立大学FD連携フォーラムという団体があります。その団体から学生が学習面や生活面で互いに支えあう「ピアサポート」について話してくれと頼まれました。本学は総体として捉えきれていないと思うのですが、おっしゃった「アドサポ」やキャリア開発部の「キャリアサポーター（以下「キャリアサポ」）」等の学生が主体となって大学の事業に協力する活動が、本学には数



高校生に本学の魅力を説明するという意欲は、学生の中に確実にあり、アドサポの活動は、大学または学生生活を主体的に捉え直したいという一つの意志の表れだと思うのです。

村田 そうだと思います。ボランティアであるにもかかわらず、多くの学生が関わってくれているということは、高い意欲を持っていることを表しています。

長谷川 どうしても正課と課外という2分法で捉えがちですが、このようなピアサポートに係る動きは、「第3の」学生生活として捉えられるのではと思います。課外と正課の双方に関わる立場の、どこからでも参画できるような学生間の繋がりとして、もっとクローズアップされていいのではないかと思います。

村田 昨年度、高校の先生対象の説明会で、ある高校から入試に関する説明会に来てくれませんかというお話がありました。理由として、昨年に比べて今年は本学を志願する学生が急増していると。オープンキャンパスでアドサポと接することを通して、ああいう学生になりたい、ああいう大学に行きたいと、生徒がものすごく影響されたという話だったのです。

長谷川 高校生にとってアドサポと接することは大変有意義です。実際に意志・意欲を持った学生のピュアな活動が、成果を生んでいるのですね。このような学生は、ある意味では高大連携というか、高校と大学の端境期の問題を一番よく体感しているのかもしれないですね。

村田 そうなのです。オープンキャンパスでは、アドサポは説明、案内係だけではなく、生の学生生活を紹介し、高校生と直に話す場を設定することなども行なっています。

長谷川 実際に僕も調べてみて気付いたのですが、教・職・学による協働に本学はたくさん取り組んでいるのだけれども、特徴的なことだと気付いていない構造があります。

多くあります。そういった取り組みが、学生の主体的な問題解決を促進し、コミュニケーションを育成するという観点で、FDの視点からも今注目されています。

学生が入試に関わり、

村田 僕も外部機関に調査をしてもらって初めて知ったのが、非接触者・接触者という表現です。接触者というのは何かというと、オープンキャンパスに参加したり、大学案内誌を請求した等、本学との接点があった方のことです。アドサポが接してくれた高校生が出願する割合は高いのかもしれないですね。

長谷川 よく考えたらアドサポ以外にもキャリアサポがあって、これらと教学的なサポートを関連づけると本学の特色をより明確にすることができると思います。単なるアルバイトではなく、教育について主体的に関わる仕組みの整備や学生の取り組み全般のとらえ直しや掘りおこしが重要かもしれないですね。

村田 そうですね。

長谷川 今、大学教育開発センターでも中央執行委員会に設けられた「9学部合同学生会」の学生と、定期的に意見交換の場を設け、ピアサポートや学生FDのあり方を考えています。

学生が生き生きと取り組んでいる活動を、部署ごとに捉えるのではなく、全学的に捉え直し、本学全体に資する特徴的な取り組みであるとアピールすべきだと思いました。今後、大学教育開発センターの刊行物等を通じ、是非取り上げていきたいと思っています。本日はありがとうございました。

村田 ありがとうございました。

(了)



NEW AMENITY

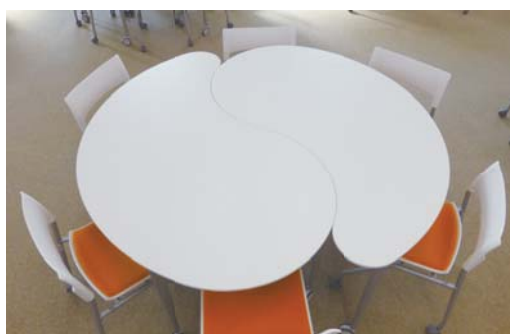
深草学舎 22号館107教室 (多機能室)

9月7日に竣工した深草学舎22号館は、政策学部および政策学研究科の開設など、深草キャンパスにおける新たな教学展開に対応する施設として計画され、学生が多目的な用途で集い交流できる談話室やラウンジ、食堂機能の充実など、キャンパス生活のアメニティの向上が図られています。

その中で、学生の主体的な学びを支える多彩な機能を備える場所の1つとして、1階107教室に多機能室(72名収容)が設けられています。

大学教育開発センターが企画に参画し、グループワークやディスカッションがしやすくなるよう設計、機器が設置された教室となっておりますので、是非ご利用ください。

設 備



●まがたまテーブル

「第7回 龍谷大学FDフォーラム2011」においてご講演いただいた、東京大学大学院情報学環准教授山内祐平氏監修の「まがたまテーブル」を計24卓、12組配置。授業の形態や実施方法に合わせて机を組み合わせることで、2～6名のグループワーク・ディスカッションを効果的に行うことができます。



●ガラスボード

教室の前後にホワイトボードとスクリーンの機能を持つガラスボードを配置しています。移動可能なプロジェクターも、2台備え付けており、映像等の投影が可能です。



●移動式ホワイトボード

グループワークの際にグループ毎に作業が可能なよう、移動式のホワイトボードを12台配置しています。

●瞬間調光ガラス

廊下と教室の間の壁面は、電圧のON/OFFで透明・不透明が瞬時に切り替わるガラスを配置しています。

利用方法

授業及びゼミの勉強会等、授業に関連する用途であれば、授業で使われていない時間に利用可能です。利用を希望される際は事前に教学部教室担当(内線1303)までご相談ください。空き状況をお伝えいたします。

※1 マイクキーは紫英館1階講師控室に設置されています。
※2 PCは設置されておりません。

今後、学びを支える様々な施設・設備をご紹介していく予定です。

BOOK

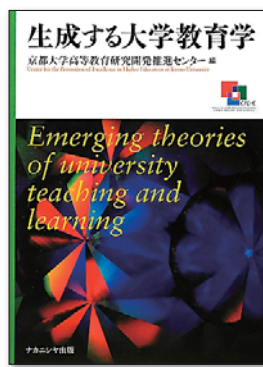
新着図書紹介



理工系学生のための大学入門

出版年月: 2012/03/30
著者: 金田 徹・長谷川裕一
出版社: ナカニシヤ出版

理工系学生のための初年時教育テキストです。取り扱う内容は、初年次教育の要素と技術的なレポートを日本語でしっかりと書けるようにするためのリテラシー教育等、学生が理解して実践し、身につけるべき内容が掲載されています。



生成する大学教育学

出版年月: 2012/04
著者: 京都大学高等教育研究開発推進センター
出版社: ナカニシヤ出版

大学教育学とは何か、京都大学のFD活動の特色である「相互研修」と教育的日常性の豊かさの中から生成される大学教育学について述べられています。



学びを共有する大学授業

出版年月: 2010/04
著者: 島田 博司
出版社: 玉川大学出版部

学生の社会化を促し、各種スキルを育成することをねらいとし、学びの共同体づくりをベースに「自分史エッセイづくり」「幸せのレシピづくり」などのプロジェクトを仕掛けています。実践した授業を分析し、ライフスキルを育成する大学授業のあり方を考えます。



学士課程教育の質保証へむけて

出版年月: 2012/03
著者: 山田礼子
出版社: 東信堂

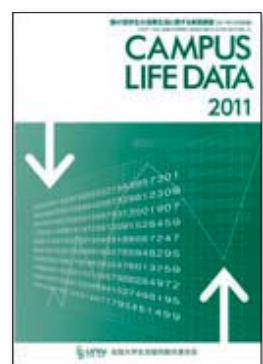
現代社会が要求する、保証されるべき教育の質とは何か、また教育の成果としての学生の質向上は具体的にどう測られるのかという問題意識のもと、現代大学教育の課題について述べられています。



大学の教務Q&A

出版年月: 2012/03/15
編者: 中井俊樹 上西浩司
出版社: 玉川大学出版部

大学教育を支える教務の業務を遂行する際の実践的知識をQ&A形式で紹介しています。入学・学籍・履修などカテゴリー別に、現場で蓄積してきた知識や具体的な対応策、大学教育に携わる教職員に役立つ業務改善の指針も示しています。



CAMPUS LIFE DATA 2011

出版年月: 2012/3/28
出版社: 全国大学生生活協同組合連合会

「学生の消費生活に関する実態調査」は大学生の生活や意識、行動を明らかにするために1963年から続く調査です。今回は長く続く経済不況が学生生活に与える影響や、就職への不安、東日本大震災後の意識など、変化の時代に生きる学生の「今」が読み取れる調査結果が掲載されています。



PISAから見る、できる国・頑張る国2

出版年月: 2012/03/02
著者: 経済協力開発機構
監訳者: 渡辺 良
出版社: 明石書店

本書は、OECD生徒の学習到達度調査(PISA)で優れた成績を収めている国々、そしてPISA調査の結果を踏まえて教育改革を進めている国々の教育システムについて、その成果と関係する要因を詳細に分析し、日本の教育システムにとっての教訓を明らかにしています。

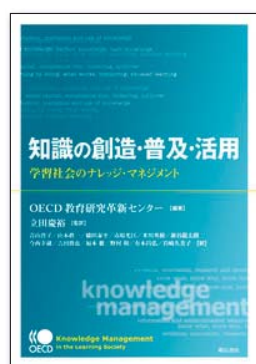


教学IRとエンロールメント・マネジメントの実践

出版年月: 2012/03/26
編著者: 日本中退予防研究所
発行元: NPO 法人NEWVERY

「中退率低減のための教学IR」をテーマに、高校時代の評定平均や欠席率、入学後の履修状況や学生満足度等の教学情報から中退予防策を特定し、効果的な中退予防策を解説しています。必要なサンプルデータを活用しながら、分かりやすく解説した教学IRの実践的入門書です。

大学教育開発センターでは、高等教育に関する書籍を購入し、情報収集に努めています。
教職員の方への貸し出し、リクエストも受け付けておりますので、是非ご利用ください。
(専任教職員の方につきましては、学内便でのご送付も可能です。dche@ad.ryukoku.ac.jpまでお申し込み下さい。)



知識の創造・普及・活用 学習社会のナレッジ・ マネジメント

出版年月:2012/03
編者:OECD教育研究革新センター
監訳:立田慶裕

学習社会における知識(ナレッジ)のマネジメントについて、知識の効率的な活用方法や評価方法等、教育のすべてのレベルにおいてナレッジ・マネジメント強化の必要性を述べています。



学生の納得感を高める 大学授業

出版年月:2012年03月
編者:山地弘起/橋本健夫
出版社:ナカニシヤ出版

授業改善への取り組みから浮かび上がったキーワードは学生の「納得感」。本書は学生の納得感醸成を目的に、学生の自主的な学びの力を引き出す数々の方法や様々なツールを用いた授業の実践例を多数紹介しています。



大学の授業(新訂版)

出版年月:2012年04月
著者:宇佐美寛
出版社:東信堂

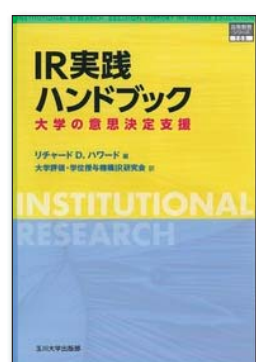
「授業の目的は、授業の正しい秩序を教えることを含むべきものである。つまり、学生は、学校における授業のありかたを学ぶべきなのである。」一著者自身の授業を素材にして、大学の授業の目的・内容・方法を論じています。



基礎演習ハンドブック (改訂新版)

出版年月:2012/05/15
著者:関西学院大学総合政策学部
出版社:関西学院大学出版会

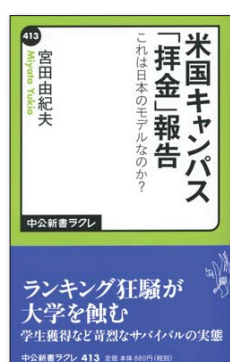
関西学院大学総合政策学部によって作成された、新入生が大学での学びを充実したものにするための、演習・ゼミナール等における基本的なスキルに関するガイド・マニュアルです。



IR実践ハンドブック 大学の意思決定支援

出版年月:2012/03/15
著者:リチャード・D・ハワード 編
大学評価・学位授与機構IR研究会 訳
出版社:玉川大学出版部

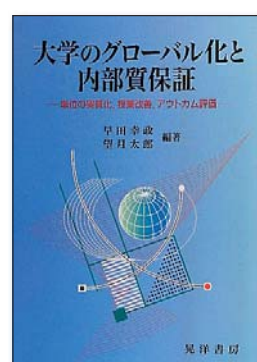
学習成果や学内のデータを収集し分析した情報を、自己評価や質保証、計画策定につなげていくインスティテュショナル・リサーチ(IR)という機能が注目されています。IR担当者が心得ておくべきツールやデータ分析の手法、学内への貢献の仕方を解説しています。



米国キャンパス「拝金」 報告

出版年月:2012/03/10
著者:宮田由紀夫
出版社:中央公論新社

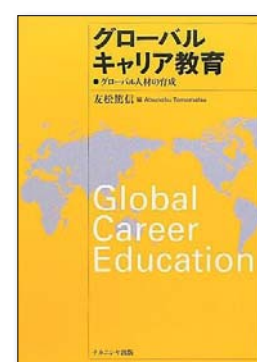
ランキング競争の過熱、産学連携、スポーツでの学生集め等、米国の大学がさまざまな面で自らの活動を営利目的化する実態を紹介しています。



大学のグローバル化と 内部質保証

出版年月:2012/04
編者:早田幸政/望月太郎
出版社:晃洋書房

大学教育の実質化と質保証のあり方を探り、大学教育の国際的通用性や、知識・能力・スキル等を修得・形成するにあたっての課題について、グローバルな視点からアプローチしています。



グローバルキャリア教育 グローバル人材の育成

出版年月:2012/03
著者:友松篤信
出版社:ナカニシヤ出版

本書はグローバルに活躍できる人材に必要な能力「グローバルマインド」を教育育成するためのテキストとして、海外で活躍する人材を育成するためのキャリア教育について、具体的な実践例やノウハウ・考え方も豊富に掲載されています。

「学生FDサミット」 参加報告

大学教育開発センターでは、2012年度より、本学のFD活動について学生との協働のあり方を検討・意見交換するため、学友会組織の一環として学友会選挙で選ばれた代議員から構成される「9学部合同学生会」と継続的に意見交換を行っています。

9学部合同学生会及び中央執行委員会正課局の学生の方に、大学教育の改善について学生、教員、職員の三者が参加する学生主体のイベント「学生FDサミット」(2012年8月25日・26日開催、主催：立命館大学学生FDスタッフ・立命館大学教育開発推進機構)に参加してもらい、感じたこと、本学の教育活動に対する意見等を報告してもらいました。学生の皆さんありがとうございました。



経営学部 執行委員長 小鍛冶 敏成



学生FDサミットに参加して、他大学の多くはFDを学生・教員・職員の三者間で上手く連携して、またFD活動もしっかり体系化されていると感じました。まずは、お互いが遠慮なく話し合える場や雰囲気を作ることが大切だと思いました。そして、「キッカケ」作りもとても大切だと感じました。始めから目的意識がはっきり決まっ

ている人は少ないと思いますが、誰かの影響を受ける等「キッカケ」がある事で人間は大きく成長出来ると思います。それを活かしていく事が大切だと感じました。

これからは、全ての龍大生にFDについて知ってもらい、そして継続的に活動していける体制を作っていく必要があります。学生・教員・職員が交流出来る場を多く作り、3者で連携していく事でより良い龍谷大学になっていくと思います。

法学部 執行委員長 大上 陽平



8月25、26日の2日間立命館大学において、学生FDサミットに参加しました。各大学の取り組み状況などを聞き、質問する事で、他大学と接する事の無かった私にとってはいい刺激になりました。

参加してみての感想ですが、あくまで学生FDは自分たちの正課環境を良くするための「手段」であり、「目的」ではないという事です。いくつかの大学では、学生FDにおける活動自体が目的となり、それによってどのように自己実現をしたいのか考えていない学生が多いと思いました。まずは自分がどんな事を学び、身につけたいのかを考え、それを実現する為に学生FDの組織の力を活用すべきだと思います。活動の規模が大きいから、必ずしもFDにおいて先進的な大学だとは私は考えていません。

学友会 中央執行委員会正課局長 上野 貴裕



今回、初めて「学生FDサミット」に参加しました。このイベントには、全国の大学生の特に授業に対して前向きな団体が中心として集まっています。実際の活動内容や取り組みを知る事が出来る活動紹介ブースや分科会、他大学の方々と議論をしながらコミュニケーションも出来る「しゃべり場」のような場に於いて、多くの大学の方々と関わる事が出来ました。

この場で感じた事として、まだまだ龍谷大学にはFDに対する積極性が欠けているという事と、教授と学生との関わりがあまりにも疎遠になってしまっている事が問題だと思いました。そのため、今後しゃべり場のように教員と学生とがボーダーレスに関わっていけるイベントを積極的に開催していければと考えています。